

平成23年度教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

大学生は、「子どもむかし生活体験村」において、昔の人の生活に興味を持つ小学生たちに、自分たちが学んだ愛媛の伝承文化を伝えることができました。そして、地域に根ざして活動しようとするリーダーとして成長しました。

1. 事業実施までの経緯

本事業は、当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、今日日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から「自然と文化の融合体験」および、それを通じた地域に根ざして活動する「リーダー養成」を目的として、平成19年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。

昨年度は、共催している国立大学法人愛媛大学の学生の参加希望者が多く、全体の参加者の大半を占めた。国立の施設主催の事業として、幅広く参加者を募集する必要があるという課題が残った。5回目となる今年度は、昨年度の反省を踏まえて、他大学との連携も強化し、多くの学生への広報に力を注いだ。

小学生の参加対象は、昨年度に引き続き、4～6年生とした。小学生の広報の範囲は、愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。

内容については、昨年度は「竹」をテーマに事業を展開したが、今年度は我が国が古来から稲の生産が盛んで、農村においてその副産物である「わら」を多く活用していたという歴史を踏まえ、「わら」と昔の人の生活のつながりを学ぶことをテーマとして、プログラムの配置を行った。具体的には「わら草履」にまつわるエピソードやその作り方を惣川地区の方々から大学生が学び、小学生に伝えるというプログラムを実践した。

以上の点を考慮しつつ、国立大学法人愛媛大学を始め、他の関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

2. ねらい

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」の運営を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3. 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

4. 後援 [後援] 愛媛県教育委員会 西予市教育委員会
[協力] 西予市野村町惣川「土居家」

5. 期 日 平成23年8月22日(月)～26日(金)
(子どもむかし生活体験村は8月24日(水)～26日(金))

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家（22日（月）
西予市野村町惣川「土居家」（23日（火）～26日（金））

7. 募集人数 大学生12名（募集人数15名）
（子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生24名（募集人数20名））

8. 講 師

岩本康孝氏（大洲市立河辺小学校教諭）
 大本敬久氏（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）
 犬伏武彦氏（松山東雲短期大学特任教授）
 西予市野村町惣川地区の方々
 山崎哲司氏（愛媛大学教育学部教授）・日野克博氏（愛媛大学教育学部准教授）
 国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

8/22 (月)	9:30 10:00 10:30 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:30 20:30												
	受付	開講式	アイス ブレイ ク	昼 食	現代の 教育	ロープワーク	体験活動の 意義と方法	うちわ 作り実習	子どもとのかか わり方について	夕入 食浴	リーダー について	情報交 換会	
8/23 (火)	9:00 10:30 12:30 13:30 15:30 18:30 20:00												
	土居家 へ移動	愛媛の民俗文化 について (現地研修)	昼 食	『むら探検』 現地下見	むら草履作り実習 (安全管理)	夕入 食浴	リーダーズプログラム立案						
8/24 (水)	8:30 10:30 11:00 12:00 13:00 15:00 17:30 19:30												
	「子どもむかし生活体験村」 運営準備	開 村 式	なかま づくり ゲーム	昼 食	土居家探検	うちわ作り	夕入 食浴	リーダーズ プログラム計画					
8/25 (木)	9:00 11:00 18:00 20:00 21:00												
	むら草履 作り	リーダーズプログラム① (昼食を含む)							夕入 食浴	リーダーズ プログラム②	ふり かえり		
8/26 (金)	9:00 12:00 13:00 13:30 15:00 16:00 17:30												
	うどん作り むら草履作り			昼 食	閉 村 式	小学生帰所 大学生片付け	ふり かえり 閉 講 式	大学生 帰所	解散				

10. 活動内容

〈第1日【8月22日（月）】〉 国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」 国立大洲青少年交流の家職員（10：30～12：00）

参加した大学生12名の緊張をほぐすことを目的として、アイスブレイクを行った。様々な活動を行う中で、自然に笑いが生まれ、参加者同士の交流が深まった。24日（水）から始まる「子どもむかし生活体験村」で、小学生に「なかまづくりゲーム」を実施できるようにするためのスキルを身に付けることもできた。



「現代の教育」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（13：00～14：00）

愛媛大学の山崎氏が現代の教育についての講義を行った。その中で、企業が大学教育に求めていること等のデータを示し、大学での活動を通してジェネリックスキル（社会人基礎力）を身に付ける必要があると述べた。また、今回の教育事業で自分は何を学びたいかを考え、自分が持っている長所を生かした目標設定をすることの大切さを強調した。そして、その目標達成のための計画、事後のふりかえりの重要性についてもふれた。大学生は、これから始まる事業を見据え、その目的を明確にすることができた。

「ロープワーク」 国立大洲青少年交流の家職員（14：00～15：00）

翌日から移動する西予市野村町惣川における屋外活動において、急な天候の変化にもブルーシートを利用した雨よけなどで対応できるよう、ロープワークを学ぶプログラムを設定した。国立大洲青少年交流の家次長による説明の後、使用頻度が多い「本結び」「もやい結び」を中心に、各自ができるだけ多くの結び方を習得できるよう練習を繰り返した。大学生は熱心に練習に取り組み、習得した技術を現地で活用できる手応えを得ることができた。



「体験活動の意義と方法」 国立大洲青少年交流の家職員（15：00～16：00）

国立大洲青少年交流の家次長が、体験活動の重要性についての講義を行った。青少年の現代的課題を引き起こした原因の1つに体験活動の不足が挙げられると指摘し、それを解決するための体験活動の意義を説いた。そして、不足している体験活動を子どもたちに積極的に実践できるリーダーに成長して欲しいとの願いが述べられた。

「うちわ作り実習」 国立大洲青少年交流の家職員（16：00～17：00）

「伊予竹に土佐紙貼りてあわ（阿波）ぐれば讃岐うちわで至極（四国）涼しい」と歌い継がれているように、四国は竹や和紙、のりなどの各地の産物を使用してのうちわ生産が盛んな地域である。このような地域性を生かしたプログラム「うちわ作り実習」を実施した。大学生は、24日からの「子どもむかし生活体験村」で小学生に指導ができるように、のり付け方法等、指導のポイントを学んだ。

「子どもとのかかわり方」 大洲市立河辺小学校 岩本康孝氏（17：00～18：00）

大学生が小学生を迎える前に、子どもとのかかわり方について学び、その不安を解消するという目的で、昨年度より導入しているプログラムである。河辺小学校の岩本氏から、「子どもとのかかわり方」と題して、「子どもを取り巻く課題」、「集団作り」等の講義や演習を行った。子どものほめ方や叱り方、学級集団をまとめるためのルール作りの方法など、自身の経験に基づいた実践的な内容の講義であった。大学生にとっては、実際の教育現場で活躍している先生の話聞く貴重な機会となった。

「リーダーについて」 国立大学法人愛媛大学 日野克博氏（19：30～20：30）

最初に昨年度の本事業の参加者である愛媛大学理学部の佐伯友美さんが、小学生を迎えるにあたって配慮したことや事業前後の気持ちの変化などについての経験談を語った。続いて愛媛大学の日野氏が、よいリーダーの条件やリーダーとしての心構えについての講義を行った。大学生は、これから、小学生にとって頼りになるリーダーとして活躍しようとする意志を強くすることができた。

〈第2日【8月23日（火）】『土居家』

「愛媛の民俗文化について」 愛媛県歴史文化博物館 大本敬久氏（10：30～12：00）

愛媛県歴史文化博物館の大本氏が、愛媛の民俗文化についての講義を行った。その中で、今回のテーマである「わら」についてふれ、昭和20年代以前は「わら」が生活に欠かせないものであったと述べた。そして、現代は、親や祖父母から世代を越えて伝えられる生活の知恵が少なくなったが、再度これらを見直し、伝えていこうとする努力が必要であると強調した。大学生は、大本氏の講義をきっかけに、自分たちが文化の伝承者になる決意を固めることができた。



「『むら探検』現地見」（13：30～15：30）

25日のリーダーズプログラム①で実施予定の『むら探検』の下見を行った。『むかし遊び』等をする予定の三島神社までの道のりを実際に歩き、危険箇所の確認を行った。また、『川遊び』をする予定の三島神社水辺公園の河原にも足を運んだ。確認をしていく中で、安全に川遊びをするためには、子どもが遊ぶ範囲を決め、大学生による監視ポイントの設定が必要であることに気が付いた。

「わら草履作り実習（安全管理）」惣川地区の方々（15：30～18：30）

「わら」を扱ったプログラムとして、25日に小学生が「わら草履作り」を行う。大学生が小学生に「わら草履」の技術を伝えられるよう、地元惣川地区の方々からその作り方を学んだ。わらをより合わせて縄を作る方法や輪の形にした縄へのわらの編み込み方などを学んだ。わら草履を製作するのは初めての経験だった大学生は、悪戦苦闘しながらもその技術を少しずつ身に付けることができた。また、製作をしながら、「わら草履を履いて学校に行くと、1日で（わら草履が）ダメになり、翌日の登校のために毎日製作し続ける必要があった。」などの「わら」にまつわるエピソードを聞いた。大学生は、昔の人の生活に欠かせなかった「わら」についての話やその技術を小学生に伝えることの必要性を感じることもできた。



「リーダーズプログラム立案」（20：00～22：00）

大学生主体で実施する「リーダーズプログラム」の立案や翌日から小学生を迎えるための準備を行った。大学生が担当するプログラムについて、各係でその内容や運営方法について話し合った。その後、話し合いの結果を全員の前で発表し、広く意見を求め、共通理解を図った。また、伝統ある『土居家』で小学生を迎えるにあたり、安全に生活できるよう『土居家の掟』を定め、それを守るよう呼びかけていくことになった。大学生は、「明日から小学生と充実した活動を送りたい。」との思いのもと、団結して準備に励むことができた。



〈第3日【8月24日（水）】『土居家』

「子どもむかし生活体験村」運営準備（8：30～10：30）

ついに小学生を迎える日が来た。期待と不安を胸に、大学生は小学生を迎える準備を行った。「最初の対応が大切」の共通認識のもと、『土居家』の清掃や小学生へのかかわり方の確認等をした。

「子どもむかし生活体験村」開始（10：30～）

「なかまづくりゲーム」（11：00～12：00）

小学生が『土居家』に到着して、最初のプログラムである。初めて出会う者同士の緊張を和らげることを目的に「なかまづくりゲーム」を大学生主導で実施した。最初に全員で楽しむゲームをした後、小学生参加者24名を6つに分けた班ごとに集まり、自己紹介をした。最後にフラフープを使ったイニシアチブゲームを行った。最初は緊張していた小学生も、自然と会話が増え、お互いの距離が少しずつ縮まっていった。



「土居家探検」 松山東雲短期大学 犬伏武彦氏（13：00～15：00）

松山東雲短期大学の犬伏氏が「土居家探検」の講義を行った。犬伏氏は、『土居家』の保存に尽力された方である。最初に実際に『土居家』の中を探検し、それぞれ感じたことを自由に発表しあった。その後、『土居家』が江戸時代の庄屋の建物であったことやその役割、建築上の価値等についての説明があった。家の大きさや大黒柱の太さが県内最大級であるとのことを知った小学生からは、驚きの声が上がっていた。参加者は、歴史ある『土居家』で宿泊することの意義を理解することができた様子であった。



「うちわ作り」（15：00～17：30）

大学生が「うちわ作り」の技術を小学生に伝えた。大学生は、限られたスペースの中で効率よく活動するために、絵付けやのり付け、乾燥の場所を分けることにした。この大学生のアイデアにより、小学生はスムーズに活動することができた。自分のオリジナルうちわを手にした小学生の嬉しそうな笑顔が印象的であった。



「リーダーズプログラム計画」（19：30～21：00）

小学生に秘密にしていた翌日のプログラムを、事前に一生懸命準備を行った大学生から発表をした。そして、班ごとに集まり、これらのプログラムを安全に楽しく実施していくために、それぞれの班の目標をたて、全員の前で発表しあった。小学生は、大学生が用意してくれたプログラムをとても楽しみにし、翌日が待ちきれない様子であった。



〈第4日【8月25日（木）】『土居家』および野村少年自然の家、三島神社水辺公園

「わら草履作り」 惣川地区の方々（9：00～11：00）

今回のテーマである「わら」を扱ったプログラムである。惣川地区の方々の指導のもと、大学生が、23日の実習で学んだ技術や「わら」に関する話を小学生に伝える形式で実施した。わらをより合わせて縄を作る方法や輪の形にした縄へのわらの編み込み方などの基本的な部分を大学生が主に担当し、鼻緒作りなどの高い技術を要する部分は、惣川地区の方々に直接指導をお願いした。小学生は、初めて「わら」を扱う者が大半であったが、大学生の丁寧な指導のもと、熱心に製作に取り組むことができた。



「リーダーズプログラム①」（11：00～18：00）

大学生が主体的に内容を考え、運営をするプログラムである。竹を用いて水路を作った「流しそうめん」で昼食をとった後、天候不良のため、屋外で実施予定だった『むかし遊び』と『スイカ割り』を、近くの野村少年自然の家の講堂に場所を変更して行った。『むかし遊び』は、大学生同士の話し合いで決定した「S字じゃんけん」と「手つなぎ鬼」を実施した。最初は、異年齢集団での遊びに戸惑う小学生もいたが、大学生の優しさに触れ、少しずつ集団の中に入っていくことができた。『スイカ割り』は、初体験の者が多く、小学生にとって新鮮であった。棒を持っている者だけでなく、周囲で見ている者も一生懸命声を張り上げて、仲間を応援した。スイカが割れた時には、大きな歓声があがった。どのプログラムも事前に大学生がルールを分かりやすく説明し、安全面の配慮もできていたため、充実したものとなった。



その後、天候が回復したため、三島神社水辺公園に移動し、『川遊び』を行った。ペットボトルで作った水鉄砲を使って水を掛け合う者や箱メガネを使って水中生物を観察する者、珍しい色や形をした石を拾う者など、小学生は思い思いの遊びを大学生と一緒に楽しんだ。大学生は水での事故を想定し、交代で危険なポイントを監視するなど、安全面の配慮を行った。



「リーダーズプログラム②」（20：00～21：00）

大学生と小学生と一緒に過ごす最後の夜には、天候を考慮し、屋内で『キャンドルサービス』を行った。班ごとの出し物の時間には、大学生と小学生が考えたレクリエーション等で楽しんだ。最後にキャンドルを見つめながら、お互いの絆の強さを確認し合った。

キャンドルサービス後、「提灯」に火を灯し、『ナイトハイク』をしてみることにした。参加者は、街灯が少なく暗い中、「提灯」の灯りを頼りに肩を寄せ合って夜道を歩いた。

「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（21：00～22：30）

愛媛大学の山崎氏が、これまでの活動について、大学生への「ふりかえり」を実施した。このプログラムは、これまでの活動を振り返って、大学生が他の仲間たちを「・・・のプロ」と評価していく形式で行った。「叱りのプロ」や「褒めのプロ」など、さまざまな表現があった。大学生それぞれが、自分自身と他の仲間の長所を再認識するよいきっかけとなった。

〈第5日【8月26日（金）】西予市野村町惣川『土居家』

「うどん作り、わら草履作り」 惣川地区の方々（9：00～12：00）

最終日は、惣川地区の方々の指導のもと、「うどん作り」と前日の「わら草履作り」の続きを行った。うどん作りでは、生地踏みや製麺機を使う作業を体験し、どの子どもも意欲的に活動した。大きな釜でうどんを茹でるのは、子どもにとっても初めての経験であり、茹で上がったうどんをおいしそうに食べていた。わら草履作りでは、前日に体験していることもあり、手際よく縄をなったり、編み込んだりすることができていた。多くの子どもが熱心に取り組んだ結果、オリジナルのわら草履を完成させることに成功した。自分自身の力でやり遂げた小学生の顔は、達成感と成就感に満ち溢れていた。

「子どもむかし生活体験村」終了（～13：30）

小学生は全日程が終了し、大学生より先に帰宅する。別れる際に、小学生から大学生に感謝の気持ちを込めた歌と手紙のプレゼントがあった。小学生から大学生へ、感謝の気持ちを素直に表現したこの行為に、思わず涙ぐんでしまう大学生もいた。大学生と小学生が、3日間の事業を通して、強い信頼関係を築いていたということを感じる瞬間であった。



「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 日野克博氏氏（15：00～16：00）

5日間の活動を振り返っての「ふりかえり」を行った。大学生が事前に立てた目標を達成できたかどうかを自己評価した。第1日目に記入したワークシートを参考にしながら振り返りをする中で、自分自身の変容に気がついた。また、事業を終えての感想を発表し合うことで、大学生同士の思いや考えを共有することができた。どの大学生も充実した5日間を送っていたということが伝わってくる時間となった。

11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

*満足：78.3% *やや満足：17.4% *やや不満：4.3% *不満：0.0%

○昔の生活は大変だったことが分かった。 ○ちがう学校の友達ができる。

【大学生】

*満足：83.3% *やや満足：16.7% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

○普段体験できないことができた。 ○みんなが楽しみながら学べるものだった。

12. 成果と課題

【成果1】愛媛大学との連携を深めながら、他大学の参加者も確保できたこと

今年度も昨年度に引き続き、早期から本事業を共催している愛媛大学と打ち合わせを重ねた。その結果、今年度も愛媛大学から7名の参加者があった。また、昨年度からの課題であった他大学の参加者についても、県内の大学を中心に幅広く広報した結果、5名を確保することができた。今後も愛媛大学から10名程度、他大学から5名程度の参加者を確保できるよう、早めの対策を講じていきたい。

【成果2】天候不良による急な変更にも対応し、効果あるプログラムを実施できたこと

今年度は、第4日目に天候不良によるプログラム変更を余儀なくされた。当日の天候状態を見てからの内容・場所の変更や順番の入れ替えは難しいと判断し、前日から雨天にも対応できるプログラムを組み、そのスタッフや場所の確保も行った。変更による参加者への影響を心配したが、スタッフや大学生の臨機応変な対応により、効果あるプログラムを実施することができた。屋外での活動がメイ

ンとなる本事業では、雨天時の対応が課題となっていたが、それを解決することができたことは成果だと考えている。

【成果3】事業を通して、参加した大学生に大きな成長がみられたこと

今回の事業では、参加した大学生に大きな変化があった。事前研修を行った前半の2日間は、小学生を迎えるという実感がなく、主体的に取り組めていない大学生もみられた。しかし、「子どもむかし生活体験村」が始まり、小学生の「お兄さん」「お姉さん」として行動し、子どもと接する中で、多くのことを学び、それを自ら実践することができるようになっていった。事業後に配布した「ふりかえり用紙」にも、「積極的に次は何をするべきかを考え、子どもたちに伝えることができるようになった。」「リーダーとしての自覚と責任感を持てるようになった。」と記入するなど、自分自身の成長に手応えを感じている大学生が多くいた。

【成果4】IKR（生きる力）評定用紙（簡易版） 事前事後の比較

上位能力	心理的社会的能力							徳育的能力				身体的能力		
	非依存	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動	自己規制	自然への関心	まじめ勤勉	思いやり	日常的行動力	身体的耐性	野外技能・生活
事前	4.54	4.42	4.64	4.46	4.77	4.1	4.6	4.58	4.69	4.54	4.6	4.21	4.68	4.6
事後	5.11	4.72	4.89	4.75	4.87	4.44	4.65	4.7	5.07	5.01	4.78	4.92	4.91	4.83
差	0.57	0.30	0.25	0.29	0.1	0.34	0.05	0.12	0.38	0.47	0.18	0.71	0.23	0.23

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「IKR（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。上記の通り、すべての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。本事業との関連性を明確にすることはできていないが、小学生もこの事業を通して、大きく成長し、自信をつけることができたと考えている。

【課題1】参加大学生に対する事前研修を充実させ、その意識を高めること

今年度は、定員を超える16名もの大学生の申し込みがあり、その全員が参加できるよう事業の準備を進めていた。しかし残念なことに、直前のキャンセルが相次ぎ、実際の参加者は12名となってしまった。その原因の1つとして、事業に参加するまでの大学生の意識を高めることができなかったことが挙げられる。来年度は、大学生への事前研修を充実させ、高い意識を持って事業に臨めるようにしたい。

【課題2】高学年の子どもの自覚を促すこと

本事業には、小学校4～6年の異年齢の子どもたちが参加している。このことを利用し、6年生を中心とする高学年の子どもには、上級生としての自覚を促していきたい。今年度も食事の配膳を高学年の子どもが中心となって行うなどの機会があったが、来年度はその活躍の場を増やせるような工夫をしていきたいと考えている。

本事業は、平成19年度から継続して実施し、今年度で5回目となる。講師の方々の熱心な指導や関係機関との連携を深めてきた結果、毎年充実した事業を展開することができている。特に国立大学法人愛媛大学については、10月に開催された日本教育大学協会研究集会において、本事業の成果を全国に発信するなど、これまで以上にその絆を強くすることができた。支えてくださっている方々に感謝しながら、その関係をさらに深め、より効果的な事業を実施できるよう努力を重ねていきたい。